先史農耕社会における富山湾資源利用史に関する基礎的研究
―富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料の再検討―

納屋内高史

１　はじめに

本研究は令和５年度～令和７年度において日本海学研究グループ支援事業の支援を受け、先史農耕社会というべき弥生時代を中心に、日本海沿岸でも富山湾沿岸の資源利用史を明らかにすることを目的とする基礎的な研究を行う。

特に主たる分析対象を富山県氷見市大境洞窟遺跡出土資料とする。本遺跡は、1918（大正７）年に東京帝国大学人類学教室の柴田常恵らにより調査され、学史的には大阪府国府遺跡とともに日本考古学黎明期に縄文／弥生の分層発掘をもって成果をあげた遺跡であり、日本国内で初めて調査された洞窟遺跡と評価されている。しかし、大正時代の調査のため、今日的な視点からの資料の位置づけが充分になされていない現状にある。同資料を今日的な視点から分析、評価することは先史農耕文化における富山湾沿岸の資源利用史、つまりは日本海学を地域で大きく推進させることに繋がると考える。

そのため本研究は４つの方向性と目的をもち、研究を進める。

１）大境洞穴における生業活動を復元するため、出土縄文・弥生骨角器を重点的に分析することで富山湾周辺の資源利用を明らかにする。

２）大境洞穴出土動物遺存体は東大総合研究博物館及び氷見市教育委員会で所蔵される未同定の動物遺存体の同定を進め、縄文、弥生と先史時代の富山湾周辺の生態及び先史人の資源環境を明らかにする。

３）上記１）・２)は生業活動の復元であるが、それに加え、同遺跡下層出土縄文土器・弥生土器付着炭化物について年代測定及び安定同位体分析を行うことで洞穴利用者の古食性の復元を進め、海洋性食料への傾斜度や時期ごと、時代ごとの古食性の変化を調べる。

４）日本海学の視点から国指定史跡大境洞穴は富山県のみならず、日本の宝であることに間違いない。『氷見市史　資料編５　考古』(2005)で資料は一定量図化されているが、未図化の資料も少なからずあり、その図化を進め、資料の共有化を図る。なお、上記２）の未同定動物遺存体の同定も資料の共有化の視点を含む。

２　東京大学総合研究博物館所蔵大境洞窟出土資料の再検討

令和６年度は、昨年度に引き続き東京大学総合研究博物館所蔵骨角器の調査を行ったほか、その比較資料の調査として、氷見市立博物館所蔵大境エンニヤマ下洞窟遺跡出土動物遺存体、小松市八日市地方遺跡および羽咋市吉崎・次場遺跡出土骨角器・動物遺存体の調査を行った。

東京大学総合研究博物館所蔵資料については、弥生時代～古墳時代の文化層とされる３層～5 層から出土したものが主体とされるものの、大正時代の調査であるため不明確な部分が多く、昨年度、所蔵されている 79 点の骨角器の器種、法量、素材、製作技法等について悉皆的な調査を行った。今年度は、昨年度の調査結果を踏まえ、所蔵資料に記された注記と現在公表されている記録類との比較を行うことにより、資料の出土位置、帰属時期の検討を行うとともに、富山湾周辺の弥生時代の生業・漁撈文化の様相や系譜を考える上で特に重要と考えられるものについて、更に詳細な観察、及び文献等の調査を行い、資料の位置づけの再検討を行った。

(1) 資料の出土位置、帰属時期の検討

まず、所蔵資料の観察を再度行った結果、東京大学総合研究博物館の資料管理番号以外の情報が注記として残されている資料のあることが分かった(図 1)。情報は 79 点中 9 点に確認され、出土地区と思われる区名と「丑」ないし「五」といった文字が記されているものが多い。「丑」・「五」の表記については、「一區」、「三區」といった区名の後に記されていることから、出土層位を示している可能性が考えられる。調査時の所見と照らし合わせると、洞窟内の堆積層は表土から基盤の砂層の直上層まで 6 層に分けられており、5 層は弥生時代の文化層と位置づけられている。その為、「丑」・「五」の表記が出土層

位を示すとするならば、本資料に5層から出土したものが多く含まれていることを示唆するといえ、弥生時代～古墳時代の文化層から出土したものが主体を占めるというこれまでの所見を傍証するものと言える。

（2）特徴的な資料の検討

昨年度事業の調査結果を踏まえ、特徴的な形状をしており、富山湾周辺の弥生時代の生業・漁撈文化の様相や系譜を考える上で特に重要と考えられる疑似餌、逆刺、銛について、更に詳細な観察、及び文献等の調査を行い、機能や帰属時期、系譜等について検討を行った。

まず、疑似餌について、本遺跡と同様な「角釣針」型のものの遺跡からの出土例は古墳時代以降に限られ、三浦半島周辺や遠州灘沿岸、熊野灘～紀伊水道にかけての沿岸など、太平洋側の本州南部地域から主に出土していることが明らかとなった(図3)。また、民俗事例も出土資料と同様な分布傾向を示し、大型の回遊魚を狙った仕掛けとして現在でも利用される。これらのことから、出土している疑似餌は、古墳時代以降のものである可能性が高いと考えられるが、外洋の影響を受ける本州南部地域で中心的に用いられる漁具であることは明白であり、古墳時代以降、富山湾沿岸の漁撈文化が本州南部地域からの影響を受け成立していったことを示すことが考えられた。

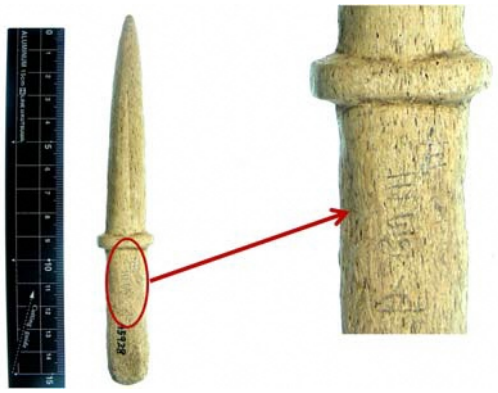
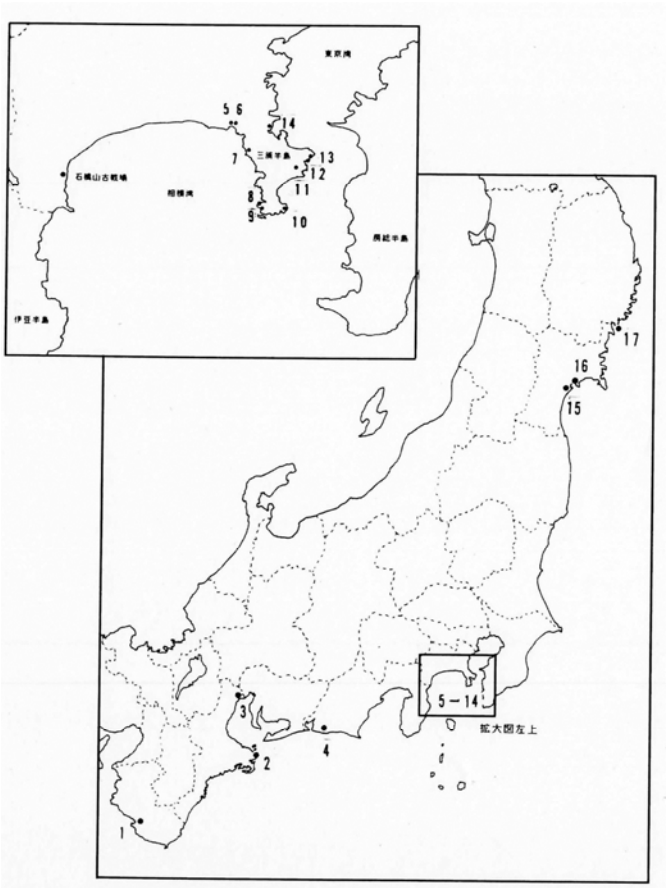


図1：東京大学総合研究博物館所蔵資料に見られる注記

図2：大境洞窟出土の「疑似餌」



1.	和歌山県田辺市磯間岩陰遺跡（古墳）	3点
2.	三重県鳥羽市白浜遺跡（古墳後期）	1点
3.	同　　桑名市蠣塚遺跡（古墳）	1点
4.	静岡県浜松市伊場遺跡（奈良初期）	2点
5.	神奈川県鎌倉市由比ガ浜4・6・9遺跡（14世紀）	1点
6.	同　　同　　由比ガ浜集団墓地遺跡（8～9世紀）	7点
7.	同　　三浦郡葉山町葉山御用邸内遺跡（古墳後期～平安）	1点
8.	同　　三浦市浜諸磯遺跡（古墳後期～平安）	6点
9.	同　　同　　海外遺跡（古墳）	1点
10.	同　　同　　大浦山遺跡（古墳後期）	1点
11.	同　　横須賀市東蓼原遺跡（中世）	1点
12.	同　　同　　鴨居鳥ケ崎横穴群（6～7世紀）	5点
13.	同　　同　　鴨居八幡社貝塚（古墳後期）	1点
14.	同　　同　　なたぎり遺跡（古墳後期）	1点
15.	宮城県塩釜市表杉ノ入貝塚（平安？）	1点
16.	同　　桃生郡鳴瀬町江ノ浜貝塚（平安？）	1点
17.	岩手県陸前高田市中沢浜貝塚（平安）	4点

図3：「角釣針」型疑似餌の出土遺跡の分布とその時期(渡辺2009より)

逆刺について、資料の詳細な検察の結果、出土している 4 点は 3 種類に分類できることが分かり、形態や民族例との比較から、それぞれ銛、魚鈎(縦型)、魚鈎(横型)の機能が推定された（図 4)。民族例では、これらの漁労具はいずれも大型魚類や海獣類の利用に関わる漁労具であり、本遺跡における大型魚類や海獣類の利用を示すものと言える。また、類例を比較したところ、これらの資料は鳥取県青谷上寺地遺跡出土の弥生時代中期の資料と形態的に類似する（図 5)。このことから本資料は弥生時代のものである可能性が高く、弥生時代における山陰地域との交流を示す可能性が考えられた。

図 4：大境洞窟出土の「逆刺」

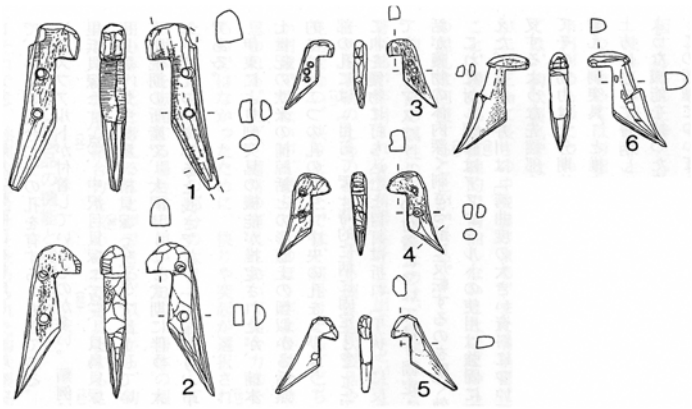


図 5：鳥取県青谷上寺地遺跡出土「鈎状製品」
（弥生時代中期中葉）
（福井 2006 より）

銛については、資料の詳細な観察の結果、金属器によると考えられる加工痕は明確に見られず、柄を装着するためのソケットや中子の形成は見られないことを確認でき、弥生時代の出土資料の中に形態面で類例のない資料であることが明らかとなった（図 6, 7)。時代を広げて類例の検討をおこなったところ、縄文時代の遺跡から出土した骨角器で「有尾刺突具」として報告されているものと形態的に類似し、縄文時代の資料である可能性が高まった（図 8)。「有尾刺突具」も機能としては離頭銛としての利用が推定されている（金子・忍沢 1986)。類例の分布は東北～関東の東日本を中心としており、縄文時代における東日本からの文化の流入を窺わせる資料と言える。

図 6：大境洞窟出土の「銛」

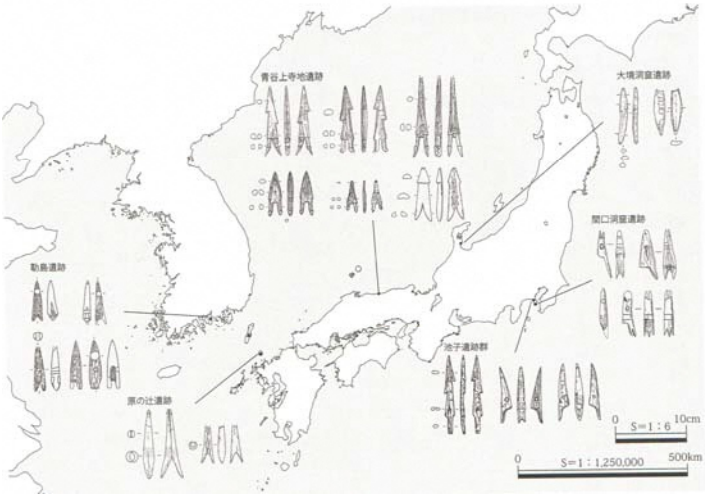


図 7：弥生時代遺跡出土の骨角製銛頭(河合他 2011 より）

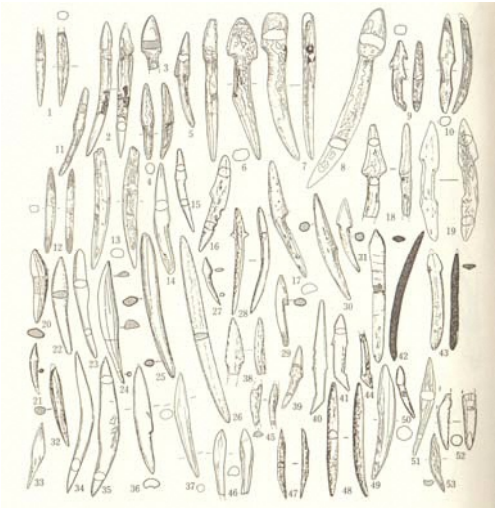


図 8：縄文時代の「有尾刺突具」
（金子・忍沢 1986 より）

以上のように、東京大学総合研究博物館所蔵の大境洞窟出土資料について、再度検討を行ったところ、資料に残された記録の面から、弥生時代～古墳時代の文化層から出土したものが主体を占めるというこれまでの所見を追認することができたが、資料の形態面からは、その前後の時期の資料も含まれることが強く示唆された。しかし、縄文～古墳以降の各時期を通じて銛や魚鈎、疑似餌といった外洋性の海産資源の利用にかかわる漁労具が利用されていたことが窺え、遺跡形成期間を通じて外洋性の漁労活動が盛んであったと考えられる。また、資料の系譜の検討の結果、本州南部地域や山陰、東日本など様々な地域から文化的な影響を受けていたことが考えられた。

3　近隣遺跡出土資料の調査

本年度事業では、東京大学総合研究博物館所蔵大境洞窟出土資料の詳細調査と並行して、出土骨角器、動物遺存体の様相の富山湾沿岸、及び北陸地域における比較資料の調査として、氷見市大境エンニヤマ下洞窟遺跡出土動物遺存体、加賀・能登地域の弥生時代遺跡である小松市八日市地方遺跡および羽咋市吉崎・次場遺跡出土骨角器・動物遺存体の調査を行った。

氷見市大境エンニヤマ下洞窟遺跡は氷見市大境に所在し、大境洞窟の南側に隣接する縄文時代～近世の洞窟遺跡である。氷見市教育委員会所蔵資料の調査の結果、貝類を除く動物遺存体は、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、イタチ、ウ類、ハタ科と言った大境洞窟と類似した種類の哺乳類や鳥類、魚類が出土していることを確認できたが、出土資料の大部分がイノシシで占められ、大境洞窟で一定量出土していたニホンジカは少量の出土に止まった。イノシシは幼獣～若獣と考えられるものが多く、この点も成獣が主体を占める大境洞窟とは異なる。これらのことは、大境洞窟と利用する動物種の面では大きく変わらなかったものの、個々の動物の利用のされ方の面では異なっていたことを示唆する。資料の帰属時期をもう少し検討する必要があるが、遺跡の継続期間が大境洞窟と大きく変わらないことや大境洞窟に隣接することを踏まえるならば、同じ集落内の場の利用の違いを示している可能性がある。また、出土した貝類の中にイイダコツボの可能性のある資料が確認された。これについては、器種や帰属時期について更なる検討を要するが、大境洞窟とその周辺で行われた過去の漁撈活動を考える上で、イイダコ漁がおこなわれていた可能性を考慮する必要性を示すものと言える。

イノシシ　椎骨(環椎)

イノシシ　橈骨Ｒ

イノシシ　基節骨

イノシシ　末節骨

ニホンジカ　頭蓋骨Ｌ

ノウサギ　下顎骨Ｒ

ハタ科　主上顎骨Ｒ

ベンケイガイ
（イイダコツボの可能性あり）

図９：大境エンニヤマ下洞窟遺跡出土動物遺存体

小松市八日市地方遺跡、羽咋市吉崎・次場遺跡は、それぞれ加賀・能登地域を代表する弥生時代遺跡であり、これまでに骨角器や多量の動物遺存体の出土が報告されている。

小松市教育委員会所蔵の八日市地方遺跡出土資料、石川県埋蔵文化財センター所蔵の吉崎・次場遺跡出土資料の調査の結果、まず、骨角器は、吉崎・次場遺跡の傾向は組成比率に占める漁労具の比率の高さや漁労具に外洋を指向する傾向が認められる点、骨製のものの比率が高い点で、大境洞窟と共通することが明らかとなった。吉崎・次場遺跡、大境洞窟がともに能登半島基部に位置する点を踏まえれば、これらの特徴は富山湾沿岸だけでなく、能登地域における弥生時代の漁労活動や資源利用の特徴を示す可能性がある。また、八日市地方遺跡の傾向は、これら２遺跡の傾向とは異なるが、このことは日本海沿岸地域の弥生時代の生業・動物利用は、北陸という範囲で見ても細かな地域差の存在する可能性を示唆する。

動物遺存体の面では、大境洞窟の傾向と比較すると、八日市地方遺跡・吉崎・次場遺跡ともにニホンジカが主体を占め、イノシシとニホンジカが拮抗する大境洞窟の傾向とは異なることを確認できた。骨角器に見られた傾向も加味すれば、このことは、日本海沿岸地域の弥生時代の資源利用が道具や捕獲対象といった側面ごとに異なった地域性や様相を持っていたことを示す可能性があり、弥生時代における生業文化の多元性を窺わせるものといえる。

図 10：吉崎・次場遺跡出土骨角器・動物遺存体

図 11：八日市地方遺跡出土骨角器・動物遺存体

4　おわりに

本年度事業による研究の結果、以下のことが明らかとなった。

・東京大学総合研究博物館所蔵資料のうち、生業・漁撈文化の様相や系譜を考える上で特に重要と考えられるものを中心に、資料の位置づけの検討を行ったところ、縄文～古墳時代以降にわたる資料が含まれることが考えられたものの、その生業は遺跡形成時期を通じて外洋性の漁労活動が盛んで、様々な地域からの影響を受けていたことが考えられた・

・周辺遺跡の比較資料の検討として、氷見市大境エンニヤマ下洞窟遺、小松市八日市地方遺跡、羽咋市吉崎・次場遺跡出土資料の調査を行った。その結果、特に八日市地方遺跡、吉崎・次場遺跡との比較では、日本海沿岸地域の弥生時代の資源利用が細かな地域性を持つとともに、道具や捕獲対象といった側面ごとに異なった地域性や様相を持っていた可能性が考えられた。

今年度事業では、出土資料の考古学的な分析により、資料群の時期幅や生業面での他地域からの影響を明らかにできたが、資料群としての他地域との比較は北陸地域に止まった。今後は、今年度事業で弥生時代における文化的な影響の考えられた山陰地域を中心に、より広域的な視野での資料群の比較検討を行ってゆく予定である。また、昨年度の研究で指摘した出土骨角貝製品から推定される漁労活動と生活残滓から推定される漁労活動との間の齟齬についても、土器付着炭化物の安定同位体分析結果も踏まえ、検討を進めてゆきたい。

《参考文献》

金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究　縄文篇Ⅰ・II』東京 慶友社

河合章行他 2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 5　骨角器（1)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 32, 鳥取県埋蔵文化財センター

河合章行他 2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 7　骨角器（2)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 41, 鳥取県埋蔵文化財センター

川添和暁・下濱貴子 2022「八日市地方遺跡出土骨角器について」『小松市立博物館紀要』56, 小松市立博物館

氷見市史編さん委員会 2002『氷見市史 7　資料編 5　考古』, 氷見市

氷見市文化財保存会編 1957『大境洞窟遺跡と朝日貝塚』

廣瀬直樹編 2007『大境エンニヤマ下洞窟遺跡』氷見市埋蔵文化財調査報告 49, 氷見市教育委員会

福井淳一 2006「骨角製魚鈎状製品について」『考古学の諸相Ⅱ』, 匠出版

渡辺誠 1989「石川県羽咋市吉崎・次場遺跡出土の骨角器と自然遺物」『石川県立埋蔵文化財センター年報』9, 石川県立埋蔵文化財センター

渡辺誠 2009「カツオ釣り用の角釣り針について」『地域と学史の考古学』, 六一書房